様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 １７ 日現在

機関番号：３４５１７
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2015
課題番号：２５７８０４９８

研究課題名（和文）丹羽徳子の教育実践・教育思想の総合的考察

研究課題名（英文）Comprehensive consideration of the educational practice and thought of Noriko Niwa

研究代表者
渡邉　由之（WATANABE, Yoshiyuki）

武庫川女子大学・教育研究所・助手

研究者番号：４０６１１３４８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では、文献調査や聴きとり調査をもとに、小学校教師・丹羽徳子の教育実践(生活綴方による教育実践)を考察した。そして、丹羽の教育実践に内在する教育思想を明らかにするために、「生活史」という概念を用い、丹羽実践を子どもが相互に生活史を交流する実践と位置付けた。子どもの生活史は、かれらの自己に関する語り(narrative)や自己を創るための物語(story)と深く関係している。丹羽実践は、これらの人間的活動を含み込みながら、子どもの成長を支えていたと考える。
　今後の研究では、先行研究の到達を踏まえながら、丹羽の教育実践と教育思想の構造を明らかにするための概念を見出し、それらの検討を重ねたい。

研究成果の概要（英文）：In this study, I considered an educational practice (exercise of “writing about life” (seikatsu tsuzurikata) of elementary school teacher, Noriko Niwa. This study uses the concept of “life history” to elucidate the educational thought contained within Niwa’s practice and identifies her method as one in which children interactively mingle their life histories.
I see children’s life histories as producing narratives about the self and stories for constituting the self. Consequently, I see Niwa’s practice as something that embraced these human activities and supported children’s development.
In my future research I wish to build on previous research in order to discover and analyze concepts that elucidate Niwa's educational practice and its theoretical structure.

研究分野：教育学

キーワード：教育実践　子ども理解　教師の生活史・教育実践史　教育思想　臨床教育学　教師教育・教員養成

１．研究開始当初の背景

(1)本研究に至るまでの研究過程

本研究は、2007 年に執筆した修士論文「丹羽徳子の教育実践についての研究－子どもの自己表現、他者理解、自己のエラボレーションと教育」(渡邉由之)に端を発する。これに編集を加えた論文「子どもの自己の成長とそれを支える教師」が『現代の援助実践と教師像』に所収されたが、そこでの論点は次のとおりであった。

①今日の教育現場における子ども理解の課題は、恵那における生活綴方教育と子ども理解によってとらえ直すことができ、②とりわけ、丹羽実践は、恵那の生活綴方教育の到達点としての教育的価値を含む実践である。③丹羽実践は、いわば、子どもの「自己」を育む教育実践であり、子どもの自己表現・他者理解への着目とともに、子どもの学習要求と成長要求の理解に努めていた。④つまり、子どもの学習（意欲・関心、教養・能力、教科・教材）への視点と、子どもの生活（学校・学級、家庭・地域、友だち・家族、生活感情・生活実感）への視点とを束ねた「子ども理解」を、教育実践構想の基盤に位置付けていた。

以上の四点を、丹羽実践の今日的意味とした。

こうした経緯を踏まえ、本研究では、丹羽実践から今日の教育事情・教育問題を捉えなおすために、その教育実践がどのようにして一人の教師の中で生まれ、磨かれていったのか、教育実践の全体把握を試みた次第である。

なお、本研究と関わりの深い国内研究及び国外研究の動向については、以下に記す通りである。

(2)国内の研究動向

丹羽徳子についての研究は、岐阜県の恵那地域（現在の恵那市・中津川市を含んだ地域を意味する）において、1950 年代から始まった教育運動・教育実践研究・生活綴方教育とともに、多くの研究者によって取り上げられてきた。

恵那研究の中心的役割を担ってきた研究者としては、坂元忠芳が挙げられる。坂元は、恵那の教育実践の指導的立場であった石田和男（小学校教師）と交流を深めながら、恵那の生活綴方の実践面では石田が、研究面では坂元が、精力的な実践・研究を行い、両者によって恵那の教育思想は広がりと深まりをもちはじめていった。丹羽徳子もまた、こうした石田や坂元を中心とした教育実践・教育思想の探求と関わりながら、自身の実践を形作っていった。（坂元の恵那研究の成果は、次の書籍に結晶している。坂元忠芳『子どもの発達と生活綴方』1978、青木書店、同『現代の子どもと生活綴方』1985、青木書店）

また、恵那地域の教育運動および自主的な教育実践（主に生活綴方教育）の研究・実践の歩みを整理し続けてきた森田道雄の研究も注目すべきものである。氏がまとめた恵那の教育に関する継続的研究は、1997 年から 2009 年にかけて『福島大学人間発達文化学類論集』に掲載され続け、その全体からは、恵那における教育運動と生活綴方教育の実践を、歴史の流れとともに概観することができる。

さらに、田中孝彦による丹羽徳子の教育実践研究は、本研究とも非常に関係深い内容である。恵那の教育実践に着目しながら、主に丹羽徳子の教育実践の教育的意味に着目してきた田中孝彦の研究は、今日における臨床教育学の構想とも重なっているが、とくに教師の子ども理解において示唆に富んでいる。田中は、今日の教師の子ども理解と教育実践の構想を、子ども一人ひとりの成長要求と学習要求をとらえること、様々な世界・社会と関わりながら、それらに働きかける存在として子どもを理解すること、子どもを要素的な能力の集合としてみなすのではなく、生きて育つ主体（生活の全体者）として把握することから描き出しており、それらの視点を丹羽実践から導き出している（田中孝彦「子どもと教育」『教育学入門』1997 岩波書店）。

(3)国外の研究動向

国外の研究との関連では、近年、医療・看護、福祉・教育、心理・臨床の領域において着目されている「語り（Narratives）」とのつながりを見出すことができる。日本の生活綴方教育が海外に紹介された例は少ないが、たとえば Mary M.Kitagawa と Chisato Kitagawa による『making connections with writing』（1987,HEINEMAN EDUCATIONAL BOOKS, INC.）では、日本の生活綴方教育の紹介と、生活綴方の方法としての書きことばによる表現と、読みあうことによる他者との関係性の構築が、簡潔にまとめられている。自らを物語ること（narrative about myself）により、他者とのつながりを育む（making connection to others）という生活綴方の教育方法に注目し、英文としてまとめられた数少ない文献である。

ただし、こうした自己の物語を教育において重視する研究として、今日では、フィンランド（現在はリトアニアに勤務）の Penti Hakkarainenn, Milda Bredhikyte らの研究チームが提唱する「Narrative Learning」や、カナダの D.Jean Clandhinin を中心とした研究チームがアルバータ州の学校や教育機関と関わりながら研究している「Narrative Inquiry（物語的探究）」がある。Clandinin らの研究は、田中昌弥によって翻訳された『子どもと教師が紡ぐ多様なアイデンティティ－カナダの小学生が語るナラティブの世界ー』（2012、明石書店）にその一端をみることができ、その研究における子どもの物語の位置づけは、本研究とも重なる点が多い。

Clandinin らは、教室において教師が子どもを理解しようとするとき、彼ら彼女らの多

様な生き方に目を向ける必要性があると述べている。とりわけ、子どもたちの生と成長を支える物語＝「支えとするストーリー（story to live by)」への着目は、生活綴方教育の子ども観と性格を同じくするものである。さらに、子どもが支えとするストーリーと教師が支えとするストーリーとの出会いから「カリキュラムづくり」を行うという構想も、生活綴方教育における教育実践の構想と近似性がある。この Narrative Inquiry についての日本での研究は始まったばかりであり、生活綴方教育との共通性を論じた研究はまだ見当たらないが、国外の研究動向としては取り上げるべき研究である。

２．研究の目的

本研究は、教師の子ども理解とそれを基盤とした教育実践・学習指導の構想を、今日において重視すべき課題であると位置づけ、とりわけ 1960～90 年代を中心に岐阜県の恵那地域で教師をしていた丹羽徳子氏の教育実践を研究対象とする。そして、その実践記録を収集・整理・保存するとともに、一人の教師が教師人生を通じて築いた教育思想を歴史的・構造的に考察するものである。

それらを通じて、丹羽徳子の教育思想の総合的・包括的研究を行い、丹羽実践の今日的意味の提出、つまり、現代における「教師の子ども理解」「教育実践・学習指導の構想」「教師・保護者の協同のあり方」への教育学的視点を提出することが、本研究の目的である。

また、教育実践記録の整理は、将来の教育実践研究の発展にも寄与するものと考える。

３．研究の方法

本研究を推進するための研究活動及び研究方法は、次の通りであった。

(1)岐阜県恵那市における丹羽徳子氏への聴きとり調査（生活史・教育実践史を中心として)。(2)岐阜県恵那市の恵那教育研究所での丹羽実践に関する資料の整理、丹羽実践と同時代の関連資料の整理、研究所員及び当時を知る人々への聴きとり調査。(3)千葉大学教育学部が保管する丹羽実践に関する資料の整理・保存作業。(4)今日の子ども理解と教育実践構想に関する学会報告、学会参加。(5)本研究と関わり深い国内及び海外の研究の動向確認と研究的交流。

以上の調査・研究をもとに、丹羽徳子の教育実践の歴史的資料を整理・検討・保存し、それらを通じて丹羽徳子の教育思想の歴史的総括を行い、今日の子ども理解と教育実践の構想へとつながる理論的研究を行った。

４．研究成果

各研究活動とそれらに関する研究成果は、次の通りである。

【聴きとり調査】

丹羽徳子への聴きとり調査については、文献研究のなかで浮上してきた問いをもとに質問項目を設定し、計 3 回実施した。

聴きとり調査を通じて得られた語りは、教育実践史を検討するための指標となるものが多く、とりわけ教師として教壇に立った時期（教師としての出発点であり原点）に関する語りは、教育実践全体を理解するうえでも重要なものであった。どの語りをとってみても教育実践記録には掲載されていない事実であり、調査を通じて、教育実践の成り立ちと背景に関する語りを得ることができた。

また、調査形態に関する成果としては、聴きとり調査のような質的研究の方法論の構築を意識したことが挙げられる。近年、当事者の語り（ナラティヴ：narrative）に着目した研究手法が社会科学領域を中心に拡がりを見せており、そこでも方法論を取り巻く課題がさまざまに論議されている。本研究においても、語られたことを事実として受けとるうえで、語り手と聴き手の関係性の問題、語られた内容に含まれるストーリーの理解とその問題など、質的研究の方法論に関する課題に直面した。こうした質的研究の課題が調査の実践とともに浮き彫りになったが、一方では実践的な課題の直面・吟味を体験することができた。本調査を通じて得られた質的研究の課題は、今後も引き続き検討を重ね、教育学における質的研究の方法論の構築を目指していきたい。

【関連資料の収集・整理・保存作業】

丹羽実践に関する関連資料の収集については、地域の教育関係資料を保管する恵那教育研究所や、丹羽実践に関する資料を保管していた千葉大学教育学部（片岡洋子氏）の協力が得られ、当初の計画を上回る成果を得ることができた。

収集した資料については、重要度に応じてスキャン機器でデジタル化するとともに、紙媒体にも複写し、二重の保存作業を行った。これらの資料群をもとに丹羽の教育実践年表を作成することができた。

また、丹羽実践が胚胎した恵那地域の教育資料についても、調査の過程で入手することができた。そのうち、東濃民主教育研究会が発行し、現在では入手不可能となっている機関紙『人間・生活・教育』を複製（再生）し、丹羽実践の思想面の理解を深めるための資料として活用することができた。

一教師の教育実践をめぐる史料の収集・整理・保存の作業は、膨大な史料群を前にして、保存の原則を構築する必要があり、歴史的研究の方法論を模索することにもなった。しかし、本研究のような「教育実践思想史研究」とでも呼ぶ研究においては、歴史発掘的な調査の方法論も必要になると考える。この点については、今後さらに追究する必要がある。

【教育思想研究及び理論研究】

本研究課題における調査・研究を踏まえ、

丹羽徳子の教育実践・教育思想に関する理論研究に着手した。そこでの研究成果をまとめると次のようになる。

(1)丹羽徳子による教育実践においては、「恵那の教育」に特徴的な生活綴方による教育実践及びその思想が深く関係している。地域に息づく教育思想という地盤が、丹羽の教育実践を一層質の高いものにしているとともに、その教育思想が丹羽自身によって意味づけられている。

(2)丹羽徳子の教育思想の構造については、子どもの表現の読みとり、子どもの綴方作品にたいする批評、子どもの生活史の理解、子どもの自己の育ちへのまなざし、といった分析軸を設定した。そして、それぞれから「表現」、「綴方作品」、「批評」、「生活史」、「自己」といった基本概念を抽出し、概念レベルでの検討を試みた。

(3)本研究の到達においては、先に述べた基本概念の中から、とくに「生活史」に焦点を当て、丹羽実践における子どもの「生活史」の登場と、それが実践内部で果たす役割について考察を深めることができた。

＜引用文献＞

上記において引用箇所がないため記載なし

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 2 件）

① 渡邉由之、丹羽徳子の生活綴方教育実践の思想－とくに、丹羽実践にあらわれる子どもの「生活史」に着目して－、臨床教育学研究、査読有、第 4 巻、2016、109-122

② 渡邉由之、恵那の地域調査　丹羽徳子の教師人生の語り（１）、教師の専門性の再検討と教師教育における「子ども理解のカリキュラム」の構想（科研費・基盤 B）研究資料集Ⅰ、査読無、2013、90-104

〔学会発表〕（計 4 件）

① 渡邉由之、子ども・若者の生活史に目を向ける－3.11 後の聴きとり調査を中心に－、教育科学研究会第 54 回全国大会、2015.8.8、松本大学（長野県松本市）

② 渡邉由之、教師の教育実践の創造に向けた共通感覚を醸成する－教育実践の核心にある子ども理解の困難、世界規模の学力問題を見据えて－、武庫川臨床教育学会第 9 回研究大会、2014.7.27、武庫川女子大学(兵庫県西宮市)

③ 渡邉由之、生活綴方教育における創造的批評と子ども理解、日本臨床教育学会第 3 回研究大会、2013.9.28、武庫川女子大学（兵庫県西宮市）

④ 渡邉由之、丹羽徳子の生活史・教師期実践史とそこでの子ども観・教育観の形成について－教育実践に関する聴きとりから－、日本教育学会第 72 回大会、2013.8.30、一橋大学（東京都国立市）

〔図書〕（計 2 件）

① 渡邉由之（著）、田中孝彦・佐貫浩・久冨善之・佐藤広美（編著）、かもがわ出版、『講座・教育実践と教育学の再生　別巻　戦後日本の教育と教育学』、かもがわ出版、2014、319

② 渡邉由之（著）、田中孝彦・片岡洋子・山崎隆夫（編著）、かもがわ出版、『講座・教育実践と教育学の再生　第１巻　子どもの生活世界と子ども理解』、2013、303

６．研究組織

(1)研究代表者

渡邉　由之（WATANABE YOSHIYUKI）
武庫川女子大学・教育研究所・助手
研究者番号：40611348